
I はじめに

我が国周辺海域に広く賦存するメタンハイドレート（以下、MH）を有用な国産資源として実用化するために、2001年に発表された「我が国におけるメタンハイドレート開発計画」（以下、「開発計画」）に基づき、（独）石油天然ガス・金属鉱物資源機構（JOGMEC）及び（国研）産業技術総合研究所（AIST）が構成するメタンハイドレート資源開発研究コンソーシアム（MH21）は、フェーズ1（2001-2008年度）の成果を引き継いで、フェーズ2（2009-2015年度）及びフェーズ3（2016-2018年度）の研究を進めた。

この間、東日本大震災とそれに伴う原子力発電所の停止、原油価格・LNG価格の乱高下、シェールガス革命、地球温暖化対策と再生可能エネルギー導入の進展など、我が国内外でのエネルギー事情は大きく変動したが、我が国の一次エネルギーの大部分が輸入に依存する状況には変化がなく、「我が国周辺海域に相当量の賦存が期待されるMHについて、将来のエネルギー資源と位置づけ、その利用に向け、経済的に掘削・生産回収するための技術開発を推進し、エネルギーの長期安定供給確保に資する」という初期の目標に従って、フィールド開発技術、資源量評価、生産手法開発、環境のそれぞれの分野について継続的に研究開発を行い、2回の海洋産出試験の実現を含む数々の研究成果を生み出した。しかし、MHを経済性のある有用な資源とするには引き続き研究開発を進める必要がある。

本報告書は、フェーズ2及び3に実施した研究の経緯と成果を総括し、残された課題を示して、国民の理解を深めるとともに、今後の研究開発に資するものである。

参考資料

フェーズ1 総括報告書

http://www.mh21japan.gr.jp/pdf/seika/phase1_20110622.pdf

フェーズ2 実行計画

http://www.mh21japan.gr.jp/pdf/phase2_1.pdf

フェーズ3 実行計画

<http://www.mh21japan.gr.jp/mh21wp/wp-content/uploads/dcabf86445c52bd52bf120c9828c5374.pdf>